





門ル2  
3097  
巻13



日本行紀

第二十九篇

歸程

此洲十悲一紀離別... 今一帰程の途... 復暫く下田に至り一時定約の善知... 和乎多る氣候... 颶風の十二度に至る... 千八百五十四年第十月海中に於て... シスシス

大蔵省  
262.5  
印



前月の廿十二日はヨムモト山ベルツヨウエの  
海峡を超へ歐羅巴州通り家郷に帰らんとて吾  
伎に別を告げコイテナニトベニトモ之に伴ふ  
て分袂せらるる至ルリ○余幾二年間常に吾父  
行ふる尊き大都督の傍に眠侍して過きける小  
今第一の此人及び吾友ベニトトモ別きて海中に  
出帆するハ余は在る異なるおとらぬ

余喜て此の二人と伴ひ同く本國の裡底を再  
度まゝ跋渉したまは其情多るや如何をや然る

日本

とも余ハ本務の首より由り已むを得ずスミス  
シツビの船に残るおとらぬ此は是れ船中猶余  
の本務とに並諸の瑣事有り之を齎整し又  
服行せらるるハ吾等合衆國に歸るまで十分なる  
任荷なりをり  
吾伎北霧遊ハ珊瑚維知島金山洞ルガイリシ  
ントシヤアニヘルナニテ凶台ビニツの有名る  
る島に到り而て世人家に在て法王誕辰の祭哉  
設る期日は思ふに吾伎ハタケルラアニアの  
海門に在るべし○此地よりメキシコの内洋る







嗚呼余の志ハ前日述る者と全く同ドキハと哉  
得む○余志を立て已を待以テ少年好學の精神  
を尽以テ以て一々るモハ幸ニ能ク事を畢る  
小至りて而て余ガ功一般の公役ニ比して其分  
極めて小なる者なりと雖ともまゝ榮誉なりと  
謂ふべし然ども此の如き幸ひなる経過を以て  
も亦余の志ガ所の利用ハ多分消滅をるゝ  
幾一〇余今まで頭を延て期する所の時小至る  
小及んでハ亦余以て幾万事の既ニ畢るを悲  
しまりめ而て更ニ他事は轉視せざるを得ざら

むるふと余は於て明々なりとけ○余は輯集す  
る富大なる事物を齊整せるの愉快なる事業ハ  
就ニ黙しく止むハ極めて静穩なる術にて  
其愛惜をべき要用幸哉得べりとす  
其後ハ尚一次日本小到るべしとす是即ち莽三  
次なりヨリスコエハシナシツブレハ共ニ既ハ先  
づ下田ニ到リ々ハ吾徒も亦その地小向ツり  
下田ハ曩日は比モハ多分変革せる事ありと  
も其一ツハ帝國の官人小從て江戸より来リ一教  
多の後者士卒ハ皆散去ト其一ツハ住人皆再其尋



常の産業小復したりとす○吾徒此地に来ると  
雖人々奇異の着を為すに至らばれを吾徒も最  
日の如く困却するに至るまで人の觀望を受  
るに至らばれ而て吾徒此地にて住家に入ま  
るとも凡て曩日の如く紛混するに至らばりき○  
人々吾徒の逢ふを喜びて而てコトモド止の  
政學明達確實にして既に善功を奏するも實  
小余々信する所なり○吾徒嘗て日本人を凌壓  
するのミヌラ信實は是を以て朋友と爲しり  
と謂ふべしとす

余此地にて終り小逗留せし時一二次相接して  
諸人と再會し信實小礼をなせるも余の悦知  
るべしとす○或人の街裏稠人の中に余が名  
を呼び又或人の茶及び寒具を携へて余を訪ひ  
来れり又他の將官と来れり而て余ヲロウシ氏  
と共に庖厨を置きある寺の老僧吾徒の居り  
し室を超へて腥膻の氣を嗅ぎ痛く困るれど  
も吾徒は向てつれづれに言ひ及ぶ事なり  
此時正に新月の出づる日は当りしれを余甚奇  
異なる祭佛の法を觀るかと心得り是此時節



諸家とも多分行ふ所あり○是を行ふ時、当り  
其家の佛の存在せる箱の前、家眷の女伴各坐  
して經文の類を諷誦し各左手に小銅鉢を持ち  
小き木槌にて同時は打着して其經文と同一は  
節奏して互に應酬せしむ○其讚歌の聲響甚ぶ一  
致せりとす

此地氣候ハ恒小平和にて怡愉をべしとす二十  
四日二十五日ハ風有て稍凄冷なりし餘ハ吾徒  
允て温暄なる日を送りあり○固より此地にて  
ハ嚴冬をむ知らざると見えあり○吾徒先茅四

月ハ好日未りし初ハ万物皆新鮮にして綠翠を  
含めり而て第九月の末に至り此地を去る時ハ  
風物尚十分小麗飾して有りき○其稻田正小二  
次の熟稼を得べし其始小熟せるハ既小茅七月  
の初めし刈り納めり○此地にてハ果实尤多  
くして且佳味あり梨椽ハニニウ区及び蒲萄  
をも見り○然るは此蒲萄ハ琉球より送り来  
る所にて稍高價なりと云  
吾徒此地下田を去る時ハ亞米利加の寺にて  
既ハ三の新墳を連ねり○ケニ子テといふ運



漕船の學士ハシルトニシテスコエハニシの艦  
ニ旅客となりて乗りたりけるニ海上ニ没し  
たり々れを此地ニ埋め多し

葦十月の朔午後二時ニ吾徒碇を揚げり余常  
例能く用る平安といへるを日本語ニ云々  
リ○此旅路初ハ逆風ニも拘らば極めて幸運を  
得たれとも忽然として天氣轉變して七日ニ  
大颶と化せり是吾々海行の中ニ未だ曾て逢  
たるハとなき所なり  
吾々コレガトシテ堅牢なる此時ハ甚危険なる驗

と歴り○朝七時ハ颶風の暴厲なること既  
ニ符の七度ニ至れリ「是吾徒風の強弱を航曆  
記別する為ニ十二度の量器を齊らしたリ其後  
ハ久しく符の十一度ニ止まり而て午後小大半  
符の十二度ニも到れリ○此天變の怖るべき驗  
乱を余實ニ忘るゝハとを得て今方其之を拳  
證とべしと云○吾徒ハ團欒して居り上帆々  
皆既ニ早朝ニ脱下した水を前後の短帆の外  
ニ我徒帆を送らむと欲せれども如何とも為  
るハと能く云○前屋ニ行く人ハ已むを得て皆



コリニグ<sup>レ</sup>沿ふて堅保をる小至れり而て舵<sup>ノ</sup>  
管する諸人ハ輪の駆却を避る為ニ種<sup>ノ</sup>の勞苦  
をま<sup>シ</sup>り<sup>リ</sup>○海水の高きおと救輪箱の上十五  
フ<sup>ト</sup>より二十フ<sup>ト</sup>小及びたり○秒時毎ニ  
漲溢せる海濤来りて船の前半全く水中を潜り  
其沫<sup>ノ</sup>起<sup>ル</sup>たる鹹き海水幾<sup>ク</sup>吾徒をして省せしむる  
ニ至り軟滑なる屋上ニ在る<sup>キ</sup>ツベニホッケンスビ  
一<sup>ニ</sup>轉回をべき圓材皆適宜ニ緩めて有り<sup>タ</sup>ま  
む跳濯して互小唐突し而て海水挺拔激躍して  
吾徒の上ニ撒布し船屋水乎より大抵三十五度

至る<sup>ニ</sup>及んで右側の障屏三分の一を失ふ<sup>ニ</sup>  
其時右重き車跳起し雷吼喧嘩して船の左側  
小展轉し屋上ニ落ち其震蕩せる邊なる物ハ皆  
塵粉となれり○四時許ニ至りてハ再ハ屏障の  
一分を失む<sup>ホ</sup>し小船ニ艦の左側ニ抵突し粉砕  
流蕩し而て他の二船も此瞬間ニハ幾<sup>ク</sup>同<sup>ク</sup>危<sup>キ</sup>ニ  
濱<sup>ニ</sup>んとし甲比丹の庖と船厨と及待詔の房と秘  
室と皆其蕩搖抵當ニ依て憐むべき状を為す<sup>ニ</sup>  
至れ<sup>リ</sup>  
吾艦ハ有名小して亞采利加海軍中最堅なる一ツ



たる事を恃みより縦に汚るの新海に航して其輪  
箱水中に没せし雖も其蒸氣機必常小齊一に運  
進して水背の頭上と交互に轉回し再び沫起せ  
る鐘内小射注するはと方小電光の迅疾なるが  
如し

此の如き瞬間小当てハ人皆其自己の勢を失ひ  
兼祚て暴戾なる天変を見て人心の精力を為し小  
制伏せらるるを覺ゆ○唯此恐怖すべき騷擾は  
て震蕩せられし時ハ兩臂の拳動緊縮して鰐  
虫の蠕たるが如く其波濤の珠球を翻逆する

小方て猛烈なる游泳手をして猶深海に陥没せ  
しを一切も天運有て之が所處を示與するはとな  
し是も於て遂小失意忿憤して其生を擲捨する  
に至る況や此大颯の激烈なる喧擾は因て其死  
叫も聞得べからざるを乎○然れとも好住する  
艦内にて老練せる海夫ハ其圍繞せる損壞を見  
て怙然として此時終始通語管小て号令を傳へけ  
れを其勇腸掬まべきドブカステに及他の火伴  
俟起して速小脆薄なる所小趨りて其害損を防  
ぎ或ハ弛緩せる諸物を更小定着するを勉た



日將小沈まんとして風雨僅小予穩小なり翌朝  
小至てハ明朗温暖なる紅暎狼籍なる百物小照  
映せり○此時艦内痛く潰乱して恰多の美麗る  
る女子徹夜穩靜小舞蹈して其紛混錯雜せる衣  
裳を齧らし家小帰る者の如し○尋常ハ次序を  
正ふし精密を尽し小反して奇異なる諸物屋上  
小紛錯せり○異時ハ修飾して具ハセ此小て度  
りて捲收する所の條繩此日ハ紛拏して一處小  
敢在し其際小艣圓材缺損せるヨリベニカケニ斜

曲せる鐵具等百般の諸具混乱したれを此の如  
く疲労倦極せる男夫少くとも稍之を整復する  
が為小愈勇往しる事を服行せり

然るは吾徒も北風更に其激怒を歇めし比は  
僅に能く稍呼吸するを得たり○其晚は向て  
風正に忽然として不意に歇むに及て吾徒此聯  
間は須要なる預備を為す暇を得ざるを以て  
遂にコルは帆及びボートルステリを失ふこと  
なれり幸は此風長く続らざりし而て吾徒此後  
終始惡風に保したると雖とも多分損害を修復







食物の不任るる調理

「エアノリスの谷

第一世ガメハマの事跡考

イ、子ヲコロエ人

遊行

港内舟船 往返

發行

千八百五十四年十一月十二日洋中にて  
第十月二十三日ハ吾徒日々小風雨よて甚危  
難るる海路を航し畢りてホノルルに未

是珊維知島の王居在せる処とを○然るは  
シシ及ビシリスバハシケハ支那より此地に未  
まゝる亞墨利加第一の蒸気船左るとを預會志  
て在るへしとを  
然る小余諸事を叙述せる前ハ先吾懐を吐露を  
へし余此島の幾口碑も上る如く莊麗るると  
小就き若否さるもホノルルに府を建る可  
アフリと云へる島に就てハ吾々期望相像せし  
よりも多少異なるもありとを○島の北未方り  
先露るる曾て裨益とし成り難き不との山脊有



其脚下に一面黄色よて不毛なるるき平地ありて東南に蔓延せり○此処はホノルルといふ都府ありて其方向海濱小沼ふて屈曲し其前は幅廣き珊瑚骨あり○其港門を尋常の如く狭くして其港は廣し且萬金を其周圍に此都府彌蔓せりとを○此都府の後面は方り西北より東南へ高き山脉條達し此の護尾を假りて夏月常に起る東南の時風を防ぎ而て此山脉を種々の小谷若ハ凹徑よて穿ち通せり就中コニアノ山谷といふハ其尤大なる者よて其長英吉利里

法の六里許よて其潤十分廣くして一里半よ至る処即ち都府の左る地とを○此谷人の眼脰を休憩するよ於て幾僅ハ愉悦せしむるハ是れり此谷を通りて流るハ此の二小川あり是士田を津潤し兼て即今の如き燥乾する時節は方り草本して稍榮翠を保しむる所以なり○此裏多少の園亭有て散在し衰木此地面を圍繞して人をして愉悦活夾るるしむ此谷口の東小方り一つの山柱特峙せり之を殊に鬼の飲器と名る者トす○此物既に多年の前より



消滅せる噴火山小て漏斗状の孔をなせる者、  
るも疑ふ一其四面ハ「テ」の液流出して結着固  
保し而て漏斗状裏にハ赤褐色の引<sub>レ</sub>液幾<sub>レ</sub>全  
元満して其低周縁ハ猶僅<sub>ク</sub>露ハセリ  
此尖隅ヲ頼て十分小都府及び港内を護る小  
豆<sub>レ</sub>り若し其高処水の缺乏を補ふと太多難<sub>ク</sub>  
らきる時ハ殊小外城を設る小過セリといふ  
一〇今時ハ此処小旗竿及び大砲十二座の砲墩  
あり砲の口径ハ極めて一致して其模状の由て  
来る所ハ極めて異なるリ伊斯泥厄亜の九磅<sub>ノ</sub>が

ルロナ一<sub>レ</sub>正より英吉利の長き二十四磅小至リ  
各自の砲車あるも一〇然るも多分極めて用  
由へわらさる者ハ屬セリ  
此谷口の東南の隅に方り別<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>同<sub>ク</sub>消滅せ  
る噴火山あり而て其消滅極めて遠古小ありと  
是をキヤマ<sub>レ</sub>尖と名<sub>ク</sub>  
余<sub>レ</sub>眼目の及ぶ処までハ此地全く樹木<sub>ハ</sub>儉<sub>セ</sub>  
りとも是<sub>ハ</sub>因<sub>テ</sub>地図上<sub>ニ</sub>画<sub>シ</sub>て人目<sub>ニ</sub>炫  
耀<sub>ス</sub>へきものあること<sub>ハ</sub>縦<sub>ニ</sub>否<sub>チ</sub>さるも此<sub>レ</sub>  
よて既<sub>ニ</sub>然<sub>ル</sub>如<sub>ク</sub>図中曾<sub>テ</sub>卓絶華麗の眺望を



取るへきる一〇一ニ黄楊の小叢あるを除きて  
實小此地の場師ハ唯「ニアノ」山の谷裏小於ての  
と彼此の園亭の周匝に樹植をるとに限れると  
見ゆ然るうら其餘の谷並小高き山嶺ハ唯無益  
るる低き森有る耳〇余此地よてハ此國の華麗  
るる者と思ひハ僅々るりと云て其意より知  
へ一とに然る小珊維知一堆島の中ニ就て他の  
小嶼ハ愉快るる眺望多一と云へるハ余却て能  
信をる所なり且吾徒ハ正乾燥るる時節ニ来り  
たれハ此時方ハ小萬物枯敗るれハなり〇是を以

て余の珊維知を詳をる若一誤て其至當を得さ  
る時ハ余リ罪を恕せんことを請ふのニ〇然此共  
余の記をる所ハ余面<sup>マツタリ</sup>り看る所なり  
州ノルール山の都府ハ其創業猶遠<sup>カ</sup>らを一して  
其建構唯佳好の港小從て制をるを要セリ此是  
一堆島を攀て無双の港なり故小金山と支那と  
の間海路從來小尤要切るる処と云〇此都の住  
人五六千より上らに於るニ其内當今よてハ千  
二百人の外国人あり〇街衢の設け齊整よて往  
好廣大るる家屋多しと云此家屋實ニ多分ハ唯輕



鳥の材木にて營構せり然とも此地の熱を過  
きに寒を勝たせしめて温和なる気候を取りて  
悉く適合せりといふ。然とも西の寺院其内ハ  
羅馬カトリック宗門にてハプロテスタント  
宗門尤も及び諸扉署の造構外にも又既に  
石にて結構せる大家を見たり。○ラファエ  
ルハ珊瑚屑及び凝結せる引液の外は尚カ  
ラニ  
ト右ありて都府より甚遠からざる距離の如  
にのみあり是を以て尋常多く造構の材として  
之を用ゆる故に贈遺として相贈るに至り。○

其街衢ハ整せしめて乾燥多風の天気には皆  
非常の艱難なることを覺ゆ然るも北風如是と雖  
とも他方小在てハ正小氣候を平和より陸續と  
して健康を催すの風といふ。○  
余の極めて不平なりとをるも都府の大と相適  
せしめて驚くべき救多の酒亭ありて而て嚴  
る法令を以て一硝場のコクナハ酒ニ若ハニ半  
ドルラハ續を貴を如く醇醪の騰貴なる價ハ一  
ガルロに量五ドルラといふ。○至ると雖も  
上威を冒凌して醉酣虚脱の遊從極めて多き



事あり○是を以て知る物をして適宜を得せしむるハ決して苛酷と嚴令と小頼さるとを此の任入古昔の礼儀風習小於る疑らくハ貧賤るる族の草倉あるの外ハ其遺跡あるとる一然るハ此草舎を其裏小於てハ既小能く多の變草を受たり○此のソイテ吉邨の志の類者取取る者マて製せる小舎ハ其外面恰も大るる枯草堆堆の戸を開ち窓を開き異るハ殊り乾燥るる時節ハ愈然りとを其内部小於てハ多分適宜小潔淨小して棲住小堪

リ○而て帷幕の類小てニツの半房と断ち成せり是其一ハ棲室とる一其二ハ臥室とるせり其下面ハ河ニテニノハ草の葉マて製せる精養るる藁席を施せり此地の人ハ常マ物を蒸熟モる室外小於て一而て其法実小尋常木林マりトモ○小豚を殺して其腸を抜き去り其内部を潔淨一土坑を穿て火を燃し其内マて拳大の石を焼烙せりハ此石マて其獸の腹内マ充實一河ナ子ニ草の葉マて包裏一坑中小投一烙石上マ遺キ又之を以て全く



周西封蓋也○此製法にて其内滋潤よして桂味  
あると疑ふしと云

男子の衣ハ欧羅巴の諸衣物を其人の唯亦危得  
る小従て勉て聚綴せる雜駁なる者なり女子の  
衣服ハ之と相及して稍尋常人民の如し其女子  
多分ハ唯長衣を服し白襦衣の法の如く吾邦女  
子の朝衣ハ区といふ者と同じ○其色質ハ多般  
光澤あり殊小カナクトス(土人)ハ尤然りと云○  
其髪ハ天性鬢黒くて縮卷し而て諸花若ハ頭飾  
小て粧せり其頭飾ハ毛ある皮とハニテハハ

単の熟して金黄色よるれり子実より製せる者  
なり○其全體表艶るる容姿にて肅莊るる儀貌  
ある者ハ多分愉快するに足る○余此地にて甚  
多く婦女の馬小騎るを見たり就中男子の鞍に  
て又男子の如く坐騎せり○然るら其時ハ  
上よいへるハ区の上小尚長き物を蒙れり是其  
臆邊小纏繞して兩足よて鍔裏小踏喫し而て其  
後面ハ兩の長裾とるるて兩傍よ垂下し而て若  
し疾く馳る時ハ此長裾甚判耀して畫裏の看  
を為せり○又此上小猶尋常の男帽を冠し其上



に轉回せる大島の羽を挿てり。○余或時ハ又此  
上ノ領衣の類を衣上小施を見り即ち此地  
にて「ゼラビ」と名くる者にて四角なる木綿の其  
中央小首を穿つ為小孔を切れる者より尋常ハ  
暗黒色なる小毛皮様の物にて飾粧せり  
第十月の二十七日ハ第三世カメハメハ王の宮  
庭ふて華麗なる儀を開くへし定めたる日なり  
○然る小此王ハ其多の臣下の如く非常なる醇  
酒の嗜好めり故ハ如此華儀を行ふ時ハ臨んて  
ハ王預沈酌をるを好んで来り得ざるに至る

救るリ。○此時ハ預之を防ぐ為ハ二三日前  
王をして國中よて他処に到らしめ其處にて醉飽をる  
至らざらしむ。○拜謁を定めたる日の前々。當  
り遅く三四十人より成此る王の從者攀て騎  
て都府ヲ歸り来此以翌朝船隊の將官(此地ハ  
シシ及ヒエスコエハニケの外ハモヨニトマリ及ヒ  
州ルツモウトと云へる兩軍艦ホールルハ  
て碇を下りたり合衆國の「コシニルゲレ」君  
の住居ハ會集せり此地ハ又此地ハ来り住  
る亞黑利加人の首豪し居れり。○日中小方り吾



徒攀て玉の館パレイスに至り是他処までハ  
北パレイスと云ふ名を命をる王を得を而て都  
府の東邊まで極めて廣き園内の中央に在る所  
の構堂あり○其入口は方り王國護衛隊の第一  
口ギメニ止ハ人の卒及び二人の将官立てり而  
て稍館に近くして第一口ギメニ止ハ三十五より  
三十人の卒四人の将官と共に立ち皆赤きヤケ  
口衣のよて旗竿の下に排列せり○遊息の処に  
至るに及んで凄涼を催を回とる樂人の一列  
ハイルマロムヒハ曲を奏して人をして腸を断ち

耳を裂のよむる小至りり○ホノルトル止の鎮  
臺諸宰臣と共に一二の徒卒隊の将官を率ひて  
容を請いて之を衛舎の類の舎内小導けり此処  
小種々るる生時の大なる畫像ありて油の画料  
よて著彩せり此中第一世カソハハの畫像即  
ち其先考の記念ありて人巧の羽衣を蒙り其胸  
を文刺せり○是は次で當今まで政して没せら  
まぐる字漏生の玉の畫像並にリユケル候の畫  
像皆換めて奇異な彩飾せり○此の古昔の將軍  
ハ如何して又何の聲勢にて此地にハ来りて守



唯天の之之を知るべし  
暫ありて王考徒を請むる備へを為せりと鞞し  
未りけれハ吾徒其時一同小玉椅のある廳内  
至りし是大抵長サ四十フート濶サ二十フート  
の室あり而て其室内尤て歐羅巴製の器什を極めて  
適宜ニ設け飾りり〇〇其中央小方り一つの壁ニ對  
して玉の椅子を置きり是適宜小簡朴にて木  
材にて製せる臂ある椅子にて其倚る処の上  
一つの王冠を設けり而て其倚る処ハ第一世  
カメハムシの名高き古昔の王服を是小蒙らしむ

〇此の服極めて高價なる遺物にて全世界中の  
を華麗なる王服の一つたること論じしと〇其取  
て以て成る所の尤美艶なる金黄色の小さき衆羽  
ハ稀世の鳥より取れる物にて此鳥の翼ニ如  
羽唯ニ有るのニ而て其鳥常小見るとを得へ  
からいといふ

王ハ中等の長にて凡土人と異ると云し而て  
其形容雅好にて其威儀悦服するに足り然  
とし唯其缺所ニし言語を接するを得ざる耳又  
其眸子思慮なく轉して老なる嗜飲の人に影



しく有り得る如く其色水の如し。○ガレグジ君  
先ッ諸艦の甲比丹と先立しめ而テ各又其煩次ヲ從  
ひ更ハ其下僚の將官を先たしめ多リ。○此容  
の中ハ金山の鎮臺なる司イテナニ止館し居  
れり

王椅ハ相背して没せし。コウイスヒクいの生時  
の大なる肖像西足ハ至る者を掲けしり其次ハ  
第ニ世ガメハソハ及ひ其後の肖像を飾りし此  
而ッハ蘭領ヨテ畫ける者にて蓋ハ王の妻其他  
に訪れける時ハ其他ヨテ没せるを以てなり。

王ハ金縁ヨテ彩飾せる。コガハ此國製の表服ヨ  
テ后ハ華麗なる政羅巴の女服ヨテ畫けり。○后  
の畫像既ハ肥満の形あり是此の普天の下を通  
て三十歳より四十歳間の女子凡テ皆然ること  
あり

會儀既ハ畢るハ及んで吾諸人名其名を此処ハ  
設たる簿籍ハ臚記せる為ハ名あるを求めら  
る猶政羅巴ヨテ多く非常の會ハ於るうとく少  
間ありて諸人皆テ寧ハ別を告げたり此ハ於て  
シタフシの司樂法官ヤニケイツツ此曲を奏



一猶最後ハゴトサースゼキニ曲名王の壽を  
奏さしめて謙讓を示したり此歌曲ハ此地にて  
ハワヰの民間より採る所なり  
日後王ヨリスコニハニケニ未訪しけ此ハ平常の  
尊礼にて受待しり○此時アルテミシアとい  
ふ佛朗西のフレカト及びアリニコマラといふ  
英吉利のクルーブ船も共ニ祝發をなせしめ  
るらひ又少間の排衆儀をなしたり○王此  
の羨麗るる軍艦を甚觀樂し此船にて少間航遊  
を為さんことを願ひけり是を以てヨリスコエニケ

丹ニフランシスに至る日る第三十日小此  
事小及びたり  
ニアフ山にて田畝第一の産物ハアルロト根を  
り○此草常小水中とるる泥土底のニ生育を  
○其草形甚能紅根菜の周圍極めて大なる者小  
似大として活澆者緑なる葉あり其種類の内多  
分吾國の蔬菜の多く卷縮せる葉なりとを○其  
根恰好の肥熟を得るに及んで之を抜き出し而  
て其莖の接し処より切離し而て此莖葉の俛小  
再び地ニ挿し此ハ再び新芽を萌さる小至り



○其株收及い培植皆士人の為に処よて半身水  
泥中小没在し極めて難苦なる作業なれハアラ  
ニケニ詳ハ堪得ざる処なり○之を湯よて煮熟  
し其根の味士菓芋に異るらばして酪を灌よて  
甚滋養をへき食菜とるれり然とも土人此法よ  
て製するとい甚稀よて其俗ハ「アウ」と名くる製  
法を以て最上とセリ○此受をへき味を製する  
為よハ木鉢よアハル口ハ根苦テ許を入ル二人を  
して石器よて舂かきめ而て更よ其舂く間に於  
て漸次よ水を加灌して全く粘稠なる塊團を得

る小至り標装師の用ゆる物の如く一般なる小  
至て止む○其後此塊團を大なる桶ハ入て少く  
醸熟を催ふを間其内よありしめ其次よ之を用  
る小至り其之を餌するハ曲儀小拘らる手指  
を蘸し其指よ當る軟なる塊を指よて速小轉回  
せられ其周端よ巻き粘く者を其終指よて口中  
に入ル餌ハ○余此処よ客とまりて其指を下を  
第一の人たるを要せられしり故よ宴與周旋  
の外小敢て此諸事小談し及よして此粥を嘗み  
り○其味酸くして淡薄よ粉を混せる酸澆よ異



ありそ〇然るらう此物恰も土人の形状佳好  
して其腹和調を有して既自ら知るべき如く  
必に滋養して健剛ならむる物なるべしとを  
余既言アノ一匹の谷に就てハ都府の後方  
り連山とありて蔓延せるを説きたり此地ハ  
ホノルル山の住人鍾愛する遊行の処にて車  
を有者騎を有者徒を有者雜沓して間断ちるこ  
る〇余嘗て教と此島の相背せる方面に行遊を  
遂たり是を以て漸次山上を通る路をも試  
みたり〇大凡嘆咭利里法の六里を過て此谷忽ち

狭まり一つの隘路となり其左右高峻にて充露  
なる山壁にて閉合し大抵千フットの深壑とな  
りて路穴窮まり  
此地ハ荒荒として旅陣をへからざるの邊地な  
り是に就て余をして悲哀する懐を興さしむる事  
あり〇第一世カメハメ山(余自ら誤記せざる  
時ハ千七百七十年山コワイヒヨリヲアフシ未  
し時ハ方其軍卒を率て當今の都より稍東より  
方テ上岸し而此地の住人を種々の戦闘にて此谷に  
驅逐しければ其人此処に保ざるを願へり〇



然る小岨險岨なる峭岸の左より方り山巔まで猶  
最後失望の決戦ありて利を失へる諸人寧服従  
せんよりハとして多分峭險なる高壁上より身を  
投して以て自殺せざるを決せり。今猶此巖石  
の脚を圍繞せるクレウペ草の叢裏まで此の不  
幸なる諸人の骸骨髑髏を見る事あり

此の險岨なる岨壁より大なる平地蔓延して海  
濱に至り連山環抱して半月の状をなせり。千  
八百四十八年。至るまで人唯大なる困若危難  
を歴て此巖石を超へ匍匐して下り得し然る事

此時以来牢獄より罪を犯しし者をおし之を  
用て此路を開夷して通を極からしめり。今時  
ハ此路に沿ふて縦へ常小一二の危難ありと雖  
とも荷擔せる獸を牽て平地まで出まるとはら  
るし得る小至れり。故に徒行せる者の為には  
極めて容易にして曾て危難あるとる事

余カリツセ(谷の平行にて極まる処の小村)より  
驢を馱り来る者も輕微の品及び一二の食物を  
授けたり是カリツセより遊行者ノ子ノコ口と稱  
する男子あり實り俊傑の人なり此人能く



活潑に諳厄利亞語を話し合衆國よて新ペトホル  
ルよてさら羈遊せり而又一時ハスーキン  
山よてコニグリスといふ巫墨利加のフレガ止中  
よて服役し其要事よたも能く適當セリ然るよ  
人或る時其微醉セリ小乘し他の過誤もなしく  
して其脊上小上りけれハたゞ此ををやあしく  
取りて無礼なりと思へりこれよ依て杖撃を為  
せ小至れり○其謂ふところ小扱れハ新ペトホル  
山及び新蘭頓ハ全巫墨利加中の極めて廣大繁  
盛なる都府なるへー○然るよ新蘭頓ハ此人實

よ自ら觀さるゝ知るれとも年々其地より捕鯨船  
を乗る者極上て多く来りけれハ之よ就て彼地  
ハ危てハ形勢よ就て最勝なる都府なるへーと  
いふるを知れり○彼又第一世カメハメハの豪  
勇なるを多く説話せり此を小就てハ考ふべ  
き跡多く猶確乎として遺れりとそ遂に其説  
話よ因て余をして時を移さしめ吾後極めて疲  
倦小向てカリフ也又帰り来りよ至れり  
余此地小て余々期をる処と相及して古昔瑞典  
人の既小十年前に此嶋に建てし処の材木よて



構せる家屋内は甚佳好なる夜衛及び臥床を見たり。此村落中カロテスタンテニ宗の教徒館並小寺院及び學校あり。其寺院ハ能く瓦石小て結構せり。然とし屋ハ猶草にて葺り。此裏万人より方二千入まで入る。小堪たりの其後ニ教徒館を置きて園及び土地一面あり。

余教士バルケル君へカ付托の書翰を齎したり。然る小此人の在る処遠くして新き宗旨を建てし。此ハ尚不キリ法の十五里許北方小在りて其処小此人の這在ることを請ひ故るり。○カリ

也より大抵二里許の処小亦カトレイキ宗の寺あり。此裏までハ人皆極めて安穩ニ生活せり。然ともカトレイキの宗旨ハカロテスタンテニ宗に比すればハ尤も小なりとも。此島まで此処ニ人甘蔗を種藝する。小就て僅小試験を為せり。然とも其功を見る。小ハ日猶浅し。とも○此等ニ適せる作業人の欽を補ふ為ニ。近頃支那人を此寫ニ率ひ来り。然とも其教今日小至て尚極めて僅々たるのみ。○其他此国にてハ甚佳好なる牧地あることと見へくり。余又実



小牛の恰好なる大者にて其状最も勝れる者を  
見たり然とも羊ハ此地にてハ能く蕃殖する  
と云ハ一〇是一種の草ありて薊の如き花を開ウ  
り此花唯毛ハ粘着して之を腐敗セしむるのミ  
るらに且猶皮中ハ刺挿して羊の病を為さ至  
れハるり

ホヽルヽルヽ山にて酪及湏ハ最勝の品と云又都府  
の周囲にて多くの佳好るる蔬菜を殖せり然と  
も其價物ハ超て高しと云土果芋及ひ葱ハ金山  
の賤價るる者より漕一未ルリ雜穀及ひ卵ハ並

貴しと云魚ハ是と相返して其賤價るり殊ハ  
塩藏せる鰯魚ハ尤賤しと云是ヲレゴニより漕  
一未りて最勝るる味ある者なり〇鳥類ハ此地  
にてハ少きと見へたり余唯僅ハ鳧及ひ鴨を  
見るのミ是を以て余鳥を集め記せる書ハ富む  
とを得さりト  
ホヽルヽルヽ山ハ捕鯨船の爲ハ其造構ハ就て決  
盜を得ると疑ひるしと云〇吾從此地ハ未り  
比ハ既ハ港内にて四十艘を看たり然るハ是猶  
獵時の如きて尋常来る者のことを日ニ新しき



楠鯨師港内ヨリ入り来リ一日ハ二十より十五  
て至ると属るり而て吾去リ一時ハ此の舟百  
五十若ハ百七十も碇を下セリ○是皆夏行の候  
ハ更て其男夫を募リ一部ハ北方の外洋と日  
本海とハ一部ハ北極の地方とベリリシグの海  
門ヨリ至ルリ○其獵し得る所を賣りて船よて運  
ひられハ又南方の外洋よて冬漁をるを備へ  
たり今年ハ一般此獵ハ就て甚幸あるヨリ至ら  
加之六月間一も捕り得ざる一船帰リ来る  
ヨリ至ルリ○是と相及て他の一二船ハ多く幸を

得し者あり譬へハ南アメリカの如し是前年ハ  
三萬楠今年ハ二萬六十楠の鯨膏を得たりと此  
此捕鯨船ハ自然の觀あり其屋上ヨリ牆を以て圍  
ミたる火を焚く処ありて其上ヨリ驚くへき罐を  
遣けり而て其兩傍ヨリ着ハ六の子船ありて其  
末の圓き処高く母船の護牆の上ハ突出せり○  
此船の前部ハ屬、抵突りて破裂し包裹せる銅葉  
片々とりて其処ハ喫著せり是ハ由て世ハ云  
ふ北方ヨリ浮蕩せる氷野の激烈ある力あるを



吾徒發行する前日ヨシシツビの船は王の来訪せ  
人とを期しこり然る小玉又飲酒小就て分外の  
沈醜に至りけり是を以て免るるを得たり  
吾徒ヲアツウの南隅を画過する時大なる噴  
火山云ありて一様海中小躍起せる陸角は峙  
立せり○是皆赤く凝固せるヨシコにて知るべき  
如く甚遠古の時小消滅せる者と云

三葉山を平一と云ふは海にありては  
其の形は山に似たりと云ふは  
其の形は山に似たりと云ふは



